

悪役令息レイナルド・リモナの華麗なる退場 3



**＋レイナルド**

会社員だった前世を持つ、エリス公爵家の次男。乙女ゲームの「悪役令息」と同じ道を辿らぬよう奮闘するものの、トラブル体質のため裏目に出ることが多い。グウミドルフへの想いを自覚し、晴れて恋人同士。

**＋グウミドルフ**

近衛騎士団長を務める、フォンフリーゼ公爵家の長男。莫大な魔力を持ち、眉目秀麗。基本無口で無表情だが、レイナルドに対しては激し執着心を露わにする。

**＋ロレンナ**

神聖帝国の貴族令嬢。品格と落ち着きのある美女。

**＋アシミラフ**

ラムル神聖帝国の若き皇帝。傍若無人な振る舞いを見せる。

**＋ルシア**

乙女ゲームの主人公。ある事件をきっかけに、兄と共に国を出る。

**＋オズワルド**

ピンチの時に突如現れる魔法使。その正体は……？

**＋マズール**

アシミラフの側近。伶俐な雰囲気と威圧感がある。記憶力がいい。

CHARACTERS

## プロローグ

小さな頃、兄のようになれないのが悔しかった。

勉強も運動もよくできて、人付き合いも上手く世渡り上手な兄さんに、俺は到底敵なわなかった。兄さんが俺の歳でできたことが、俺にはできない。それが悔しくて、恥はずかしかった。家族は気にするなど言っただけで優しくしてくれただけ、心の中では呆れてため息をついていると思っていた。

家を訪れる親戚も客人も、俺を見て「まあ次男だから」と薄い笑顔でそれでもいいと言う。できないならできるまで頑張ればいい。頭ではわかっているけど、それを実行できるほど俺は忍耐強くもなく、何時間も運動を続けられる体力もなかった。

泣いているところを人に見られるのが嫌で、いつも庭の隅にある花壇の傍でこっそり泣いていた。そうしたら、ある日男の人から声をかけられた。

「こんなところで何をしているんだい？」

しゃがんでいた花壇の陰から、俺はこちらを覗いている榛色はしないろの瞳を見上げた。

父さんより年配の男性だった。その顔を見上げたまま、俺は黙っていた。相手も俺を見下ろして、じつと俺を観察していた。

やがて笑みを浮かべたその人は、しゃがんで俺と同じ目線になった。

「兄がいるっていうのは、いいものだよ」

驚いた俺は慌てて目元を拭い、唇を噛んで下を向いた。

「僕は、バカじゃない」

「そうだ。君はバカじゃない」

彼は穏やかな声で返した。

「君は偉大な魔法士になるだろう。きっと、私よりもずっと素晴らしい魔法士に」

その声音が優しく、俺はその人を見上げた。

目元と口元に月日を重ねた柔らかな皺が寄り、俺を見る榛色の瞳は若草色に薄ら茶色がかかっている。温かな色だと思つた。そんなふうになをかけたのは、初めてだった。

「もっと力を抜いていいんだよ。お兄さんのことは周りの大人達の注意を引いてくれる風避けだと思つて、君は自由にやればいい。レイ君」

名前を呼ばれて、俺は目を見開いた。

父さんの友人だろうと推測していたが、俺の名前まで知っているととは思わなかったのだ。

力を抜いていいと言われて、そのときはすぐに頷けなかった。けれど、兄さんと比べずにちゃんと俺を見て話してくれたことが嬉しかった。

目線を合わせたまま、彼は微笑んだ。

「君の話が聞きたいな。私はね、君の花壇が好きなんだ。花の色が鮮やかで、大事にされてい

ることがよくわかるよ。だからレイ君、きっと君も同じように、大人になったら綺麗な花になる」

榛色の温かな光を湛えた瞳が、明るい日差しを反射して輝く。

その穏やかな陽だまりのような瞳を、俺は黙って見上げた。その目を見てみると、自分の心の中を照らされたような心地がした。

彼は俺に顔を寄せて、内緒話をするように片手を口元に添えた。

「本当はね、この花壇を見たくてエリス公爵に会いに来ているんだ。内緒だけどね」

悪戯っぽく笑つた父の友人は、「君は花火を知っている？」と俺に聞いた。

唐突に話が変わつたことに面食らつて瞬きした後、小さく頷いた。

「知ってる。見たことある」

「そうか。花火は美しいね。私はね、もっと長く夜空を彩るような、美しい花を作れないかと思つておるんだ。もし君に興味があったら、いつか私と一緒に作ろう」

そう言つて彼は柔らかく微笑んでくれた。

一緒にやろうと言つてくれた気持ち嬉しかった。その言葉に嘘はないと信じた。

それがたとえ泣いている子供をあやすためのその場しのぎの慰めだったのだとしても、俺が救われたのは事実だった。

その人の優しく綻んだ顔を見上げて、俺はゆっくりと頷いた。心の中にあつた重石のいくつかが、彼の言葉で取り除かれた気がした。

あの人が消えた今、俺の胸の中には言葉にできないものが積み重なっている。覚えているのは苦

しくて、もう手放してしまいたいと思っても、あのときの彼の微笑みが蘇る。よみがえ  
庭で隠れていた俺を見つけてくれた人。

家族以外で初めて、俺が素晴らしい魔法士になると言ってくれた人。  
ディラン・バレンダール公爵——俺に罪を着せようとした、俺の幼い心を救った恩人。  
もう、忘れてしまおう。

何度もそう思うのに、俺は公爵に出会った日のことを今もはっきり覚えている。  
だから春が過ぎて夏が来ても、あの人を忘れることができない。

## 第一章 蓄つほみのバラと世の喜び 《開演》

日が完全に落ちた暗い道を、俺は急ぎ足で歩いていた。

見慣れた屋敷が視界に入ったとき、中に灯りが見えなかつたことに大きく安堵の息を吐く。今日  
は出先から直接グウエンドルフの屋敷に転移してきたのだ。

自分が乙女ゲームの悪役キャラだった公爵令息レイナルド・リモナに転生していることに気づき、  
悪戦苦闘の末、なんとかバッドエンドを回避して三ヶ月が経った。

事件の後、俺は近衛騎士団長のグウエンドルフと恋人同士になった。一緒に封印結界が襲撃され  
た事件を解決して、俺にかけられた犯人疑惑も晴れた。黒幕だったバレンダール公爵は逃亡したも  
の、その後王宮の地下に眠っていた悪魔を魔界に追いつ返し、悪役の汚名を返上した俺は平和な日  
常を手に入れたのだ。

季節は春から夏に変わり、俺は時間を見つけてはグウエンの屋敷を訪れるという生活をしている。  
玄関に歩み寄り、もらっている合鍵を使って扉を開錠する。

グウエンはまだ帰ってないみたいだな。バレないうちに着替えよう。

音を立てないようにゆっくり戸を開くと、中から物音はしない。グウエンの屋敷にいる唯一の使  
用人であるマーサも、今夜はもう帰ったみたいだ。

「よかった」

俺は明るく咳せきいて中に入り、廊下を進んで軽快に階段を上った。二階の廊下の突き当たりである、寝室の扉を開け……すぐそこに立っているグウエンと目が合った。

「ひっ」

思わずびよんと飛び上がった。

腕組みをした彼が、俺を見てゆっくり口を開く。

「ようやく来たか」

「……灯りくらいつけるよ。びっくりしただろ」

低いトーンの声を警戒して俺が慎重に言うと、グウエンは無表情でこちらを上から下まで観察した。

「なかなか来ない君が心配で、考え事をしていたら灯りをつけるのを失念していた」

「……遅くなってごめん」

失念してたってなんだ。

何で暗い部屋の中で気配を消して立ってんだよ。怖いだろう。

「あと十分待っても君が来なければ、考えていたことを実行するところだった」

「ん……？ えっと、ちなみに何を？」

「丈夫な鎖と、枷かぎの購入を」

「考え直せ。そして落ち着け。わかった。お前がキレてるのはわかったから」

すかさずツッコミを入れ、俺は部屋に足を踏み入れた。

月明かりで照らされた顔がよく見えるくらいまで歩み寄ると、グウエンの目がだいぶ据わっていることに気づいた。かなり頭にきているらしい。だとしても、言うことがいちいち怖いんだよ。

「連絡したし、そんなに心配させるとは思わなかったんだよ。ごめん」

「あの殴り書きした手紙蝶は連絡とは言わない。安心していい。週に二回は実家に帰してやる」

「いや怖いわ！ その思考から一旦離れろって。悪かったから。俺もこんなに遅くなるとは思わなかったんだ」

今日は俺が休みで、グウエンは仕事だったので、一人で街まで買い物に行った。

しかし繁華街を歩いたら予想外にも——いや、この際案の定と言うべきなのか、最初に迷子を見つけたのを皮切りに次から次へと厄介事に遭遇したのだ。それを処理している途中、たまたま魔石の裏取引の調査をしていたグウエンドルフとカシス副団長に遭遇した。

あのときは迷子を抱えながら脱走した犬を追いかけていたからるくに説明もせず、手が空いたときに『帰ったら説明する』と手紙蝶を書いて送ったのだが、心配させたらしい。手紙蝶というのはその名の通り、書いた手紙を相手のところに飛ばす、魔道具の一種だ。

心配させたのは申し訳ないが、でも部屋の灯りくらいはつけておいてほしい。ただでさえ彫刻みたいに綺麗なグウエンの顔が静かな怒りを湛たえていると、月明かりで凄まみが増すから怖い。

「今日は何をしていた」

静かに聞いてくるグウエンを、俺は見上げた。

「街で迷子を見つけて一緒に親を探してただけど、そうしたら露店荒らしの泥棒に遭遇して捕まえた。その騒ぎが原因で露店のお婆ちゃんが飼ってた犬が逃げ出したから、追いかけてたら今度は屋根の修理をしたおじさんが足を滑らせて落ちてきた。足を捻ったおじさんの代わりに屋根を直して、迷子の親を見つけて、お婆さんに犬を返して、おじさんにお茶を振る舞われて、警備隊に事情を説明してたら遅くなったんだ」

突っ込まれたくなくて、なるべく記憶に残らないように一息でそう言くと、グウエンは押し黙った。

俺の頭から足の先までもう一度眺めた彼は、腕を組んだまま微かに首を傾ける。

「君は、私のことを舐めているのか」

こええ……

「いや、そんなことないけど」

「ならばその服の赤い染みと蹄の跡はなんだ」

指摘されて、俺は唾を呑み込んだ。

バレたか。薄暗いからいけると思ったが誤魔化せなかった。俺は頭を掻いて白状する。

「馬車の事故だよ。泥濘にはまって動けなくなってた馬車の馬を御者が乱暴に叩いたから、馬が暴走して、馬車が走り出しちゃって。屋根に飛び乗って、中に乗っていた令嬢を助けた。そのときその子の怪我の血がついたんだな。馬を止めるために手綱を引いて、魔法で馬の脚を捕らえたのはよかつただけど、勢いが強くて二人で馬車の前に落っこちちゃったんだ。ちゃんと躲したけど、服

の裾だけ踏まれたわけ。怪我はしてないよ」

心配して怒るだろうから、バレないうちに着替えようと思ったけど、普通にバレたな。

正直に話して恐る恐るグウエンを見上げると、彼は黙ったまま俺を見下ろしていた。

「あの、グウエン？ どうしたの？」

「君を実家に帰すのは週に一回にしよう」

「ごめんって！ 今日はちよっとおかしかっただけで、いつもはこんなじゃないから！」

「私が記憶する限り、君はいつも多かれ少なかれ同じような目に遭っている」

「……」

返す言葉もない。

俺の周りで起こる事件って、ダメナルド様バイアスじゃなかったの？ 不安になるくらい以前と変わらないんだけど。おかしくない？ シナリオは終わったはずなのに、これじゃまるで俺が根っからの巻き込まれ体質みたいじゃん。

悪魔を魔界に追い返してから、シナリオが終わった解放感を味わっていた最近の出来事を振り返った。さすがにあれほど大きな事件は起こっていないが、結局色々巻き込まれてる気がする。

どういうことなの？ 穏やかな隠居生活を送るっていう当初の計画とはなんか違うんだけど。

ルシアがいなくなったせいかな？ と、俺は紫色の髪の女の子を思い出す。ゲームの主人公だったはずの転生仲間のルシアは、春の事件の後、お兄さんと一緒に帝国から旅立ってしまった。

俺を見下ろすグウエンがため息を吐いた。

「君は、義兄上にもっと落ち着くように言われているだろう」

「……」

グウェンが義兄上と言っているのは俺の兄さんであるエルロンドのことだ。知らないうちに、勝手に仲良くなつてそう呼んでいた。グウェンはグウェンで、俺の外堀を埋め続けている。

「私と結婚するという約束を忘れたわけではないだろうな」

「忘れてないよ……もう、さらつとそういうこと言うなつて。恥ずかしいから」

思わず顔が熱くなつて目を逸らした。

ルシア達を見送つた日、路上で『結婚するんだろ！』と啖呵を切つたことを俺はちゃんと覚えている。グウェンも言質を取つたとばかりにすぐに動き、あつという間に両家で話をまとめてしまった。あのフォンフリーゼ公爵をどうやって丸め込んだのかは知らないが、いつの間にか婚約申請書を陛下に提出していたのである。その鮮やかな手腕に、兄さんは手を叩いて感心していた。

しかし、問題が起きたのはその後だ。

俺達の婚約に、陛下と高位貴族達から待つたがかかつたのだ。

理由はバレンダール公爵領にある。一連の事件の黒幕だつた当主がいなくなり、空席になつたバレンダール公爵位を誰が継承するか、実はまだ決まっていな。

バレンダール公爵には妻も子供もいなかった。後継者として遠縁の子供を養子にするという噂があつたが、事件のせいでそれは流れてしまつたようだ。一族の中に精霊力の強い者がいるらしいけど、血縁者を後釜に据えるべきかどうか、まだ陛下と議會の間で結論が出ていない。

バレンダール公爵領の運営には、俺の実家であるエリス公爵家と、グウェンの生家であるフォンフリーゼ公爵家が手を貸しているが、今回はそれが問題になつたらしい。

俺がグウェンドルフと結婚したら、エリス公爵家とフォンフリーゼ公爵家に縁ができる。北領と南領が西領を支援している状況で二つの家門が手を結んだとなれば、地続きになつた帝国の大部分が両家の手に渡ることになる。貴族達はそれを危惧したのだ。

俺は最初にそれを聞いて、「ああ。まあ、確かに」とは思つたのだが、父親と折り合いが悪く家出同然で出てくるつもりだつたグウェンドルフとしては、そのうがった展開は予想外だつたらしい。お互いに公爵家の人間だということが、思いもしない弊害を生んだ。

結局、俺達は陛下に呼び出されて、「しばらく保留にする」と言い渡された。少なくとも、バレンダール公爵領の行く末が決まるまでは了承してもらえないらしい。

グウェンは、それから拗ねている。

最近、魔物が出現するようになった隣国のクレイドル王国にたびたび近衛騎士団が派遣されているのだが、カシス副団長によると、グウェンは八つ当たりするように魔物を切りまくっているらしい。

「私は本気だ。君は目を離すとすぐに危険なことに巻き込まれるから、早く結婚して君を物理的に縛りつける権利がほしい」

「……」

あのな、たとえ結婚しても、物理的に縛りつける権利は生じないぞ。それは拘束と監禁という

んだ。

真面目に恐ろしいことを言い放つグウエンに今度は俺がため息を吐いて、一步踏み出した。そして目の前にある広い胸にぼすつと頭をぶつける。グウエンの気配が少し緩んだ。

「心配させて悪かったから、機嫌直せよ。せつかく明日二人とも休みなのに、もったいない」

目を瞑ってそう言うと、グウエンは軽く息を止めた。それから尖っていた空気がいくらか和らいで、俺の背中にしつかり腕を回してきた。

\* \* \*

「そういえば、クレイドル王国ってなんで魔物が出始めたんだろうな」

風呂から出て、ベッドの上でグウエンに髪を拭いてもらいながら俺はふと聞いてみた。

「お前、最近時々クレイドルに行ってるだろ？ 理由は知ってる？」

「いや……まだ明らかになっていない。魔界の穴が開いたわけではないようだから、原因については探っている最中のような」

「ふーん……」

デルトファイアでは、俺達が王宮の地下にあった魔界の穴を封じた結果、魔物が格段に減った。その一方で、何故かクレイドルで魔物が現れるようになったから、なんとなく違和感を覚えている。

「グウエンが魔物に手こずるとは思わないけど、何かあったら俺にも教えて。しばらく討伐の協力

は続けるんだろ？」

「ああ。陛下はラムル神聖帝国の動向を気にしておられるようだから、我が国も支援を継続する」  
俺の質問に答えながら、後ろにいるグウエンが丁寧に髪を拭いた。ついでに軽く頭をマッサージしてくれるから気持ちいい。目を細めて癒やされながら、俺はラムル神聖帝国の情報をぼんやりと思いつかべた。

ラムル神聖帝国は、クレイドル王国のさらに西に位置する国だ。岩山と砂漠に囲まれた小さな国だが宝石や結晶石を多く産出し、工芸の歴史も古く、大陸の中では財力がある国だと聞く。デルトファイアと違って、ラムルの夏はかなり暑いらしい。

知識としてしか知らないが、ラムルには神聖力という魔力に似た不思議な力があるのだという。自然界にある癒力を基としていて、性質は精霊力に近いと、叡智の塔で習った記憶がある。

「あそこは王族が強力な神聖力を持つんだっけ？ あまり詳細は流れてこないよな」

「ラムル神聖帝国は我が国とは国交がない」

「そうだな、噂はちょっとだけ聞いたことあるけど。確か、砂漠に魔界の穴が開いてるんじゃないか？」

デルトファイアと同様に、ラムルでは魔物が出ると聞いたことがある。

グウエンは俺よりも他国の情勢に明るいので、すぐに答えてくれた。

「砂漠に魔の虚という封印があるらしい。その昔、デルトファイアの封印結界が完成したときと同時期に、ラムルの初代皇帝が魔界の穴を封じたそうだ」

「へえ」

バッドエンド回避を目指して生きていた俺は、他国の事情にそれほど関心がなかった。

「陛下がラムルを気にされているっていうのは、クレイドルと親密になることを警戒してるのか？」  
「そうだろう。ラムル神聖帝国もクレイドルには魔物討伐の支援を行っていると聞く」

武術の国として有名なクレイドル王国には魔法を使える者がほとんどいない。だからうちとラムル神聖帝国に援助を求めてくるというわけだ。だけどデルトフィアとラムルには国交がないから、三国は微妙なバランスにある。

陛下はクレイドルと関係を深めようとしていたけど、俺がシナリオをぶち壊した結果、レオンハルト第三王子とクレイドルのリリアン王女の婚約が破算になったしな……

数年前、港で追われていた女の子がリリアン王女とは知らず、俺は駆け落ち中の王女様と護衛騎士を他国に逃がしたという過去がある。後悔はしていないが、王族同士の縁作りに水を差したと考えると、俺はグウエンにクレイドルに行くな、なんて言えない。

「魔物の数は多いが、バジリスクのような脅威的なものは現れていない。このまま様子を見て大丈夫だろう」

「そっか。でも気をつけるよ。お前が怪我したら嫌だし」

そう答えた途端、ぐつと肩を掴まれて振り向かされた。

「うわっ、グウエン？」

驚いて瞬きしたら、向かい合う体勢になって両肩を押さえられた。グウエンがもの言いたげな眼

差して俺をじと見つめてくる。

「私のことよりも、君はまず自分のことを省みるべきだな」

おっと余計なスイッチを押したな。

乾いた髪の上に指を滑らせてくるグウエンに、俺はへらつと笑う。

「わかってるって。気をつけるから」

目を細めたグウエンが俺を引き寄せて唇を重ねる。少しカサついた唇が不満そうに吸いつくので、俺は苦笑いしながら自分からグウエンの首に腕を回して目を閉じた。

月明かりに照らされたベッドの上に、肌が擦れる音が響く。

俺の身体に本当に怪我がないか調べるグウエンは、丹念というか、執拗だった。

寝室着をたくし上げられて上半身をくまなく撫で回されるうちに、いつの間にか下衣は下着と一緒に引っこ抜かれていた。

柔らかな果物の皮をなぞるような手つきで膝からつま先まで辿った手のひらが、今度は膝から上に向かってするする上がってくる。汗ばんだ手で太腿を撫でられるとぞくぞくして、じつと見下ろしてくるグウエンの熱い視線に煽られて身体を中心に熱が点った。

「んっ、もういいから……大丈夫だから」

「ダメだ。全て確認する」

身体をひっくり返されて背中から足の裏まで、余すところなく触られた。足の付け根の際どい部

分を何度も撫でられて、服の袖で口を覆って息を殺したけれど、どんどん息が上がってくる。  
「あっ……んっ」

俺の腰骨の形まで確認しようやく気が済んだらしい。もう一度仰向けにされて骨張った手で性器をくるまれたときには、俺の分身はもう完全に勃つていた。荒っぽく上半身の服を脱いだグウェンも、薄い下衣越しに反応しているのがわかる。それに気づいて頬が熱くなった。

「あっ……」  
開かされた足の間に手が滑り込んできて、軟膏を纏った指が差し込まれる。

全身を撫で回されて敏感になっていた身体が快感を拾う。性器を擦られながら中を探られた瞬間、腰がびくびく跳ねた。

「んっ……もう、そこあんまり触らないで」

俺の弱い場所を完璧に把握しているグウェンは、迷いなく感じるところに指先を押し当てて抜き差ししてくる。くちゅくちゅと軟膏が溶ける音をわざと立てて掻き回されるのが恥ずかしくて顔を背けたら、ずしつとのしかかられて耳の縁を舐められた。

「あッ、んんっ……ひう」

ぞくつと背骨が反り返り、内壁を探るグウェンの指を締めつける。

「君は耳も弱いな」

「あ……あ……っ」

低く掠れた声が鼓膜に響き、濡れた舌が耳朶を這う感覚に震える。もうイキそうになってグウェ

ンの肩を掴んだら、早々に指を引き抜かれて熱い屹立が押し入ってきた。

「んんっ……ん、は」

「キツいか？」

「だいじょうぶ……あっ、んっ」

膝裏を抱えられて軽く揺すられる。ずぶ、と中をなぞられた途端に腰骨にびりつと甘い痺れが走って、慌てて袖で口を覆った。

グウェンに慣らされた俺の身体は、もうなんというか、非常に不本意だが中を擦られるだけでしつかり快感を拾う。いまだに前から抱かれて顔を見られると恥ずかしくて目も合わせられないのに、身体は俺の戸惑いなんてそっちのけで素直に反応するのだ。しかも最近は、性器を触られなくても中の刺激だけでイケるようになってしまった。

どうなってるんだ。俺の身体が作り変えられている。

まさか後ろに挿れられて気持ちよくなるなんて、最初に抱かれた頃には夢にも思わなかった。

これは雄として健全な反応なのか？ 男の身でありながら、こんな強烈な経験値を積んでいる俺は本当に大丈夫か？ このまま抱かれ続けたら、この快楽から一生逃れられない気がしてちよっと怖いんだが。

グウェンにそう訴えたら嬉々として「責任を取る」と宣言しそうだから言わないけど。

とはいえ、俺は実際のところそれを嫌だと思っていないから、順調にグウェンとの恋愛に嵌まっていると言える。底が見えない沼にずぶずぶに沼ってる。沼から出る気はないけど、このまま身体

を開発され続けて大丈夫なんだろうか？ と自分の将来を心配している。

「あつ、ん……あつ、ちよつ、それやめて」

グウエンが緩く腰を突き入れながら、たくし上げた俺の寝室着の下に手を入れて乳首をいじくってきた。軽く爪で引つ搔かれて、ぴりぴりした感覚が腰に来る。挿挿に合わせてぎゅつと摘ままれと、目の前が弾けるような快感が背筋を駆け上った。

「あつ、やあつ」

思わず裾に手を伸ばし、捲られた服を胸の下まで引き戻して抵抗した。

するとグウエンは、今度は俺の腕を掴んできて邪魔してくる。攻防の末に、気づいたら俺は自分で服の裾を握って胸の上まで開いていた。

「は？」

「邪魔だから、君が持つて」

「なんで、もつ、んあつ」

抵抗しようとしたら有無を言わず突き上げられた。強く揺さぶられて顎が上がり、中をぎゅうと締めつける。

「つ……ちゃんと持つて」

「あつ、わかっ……んっ」

大人しく両手で服を持つていると突き上げが緩くなったので、羞恥に耐えて裾を握った。

自分から胸を晒す格好になって恥ずかしい。居たたまれなくて、裾をぐいっと伸ばして目の上ま

で引つ張る。胸は隠すものがなくなつて無防備になつたが、顔を隠すことで少し安心する。

赤く尖った乳首をくりくり摘まれて小さく喘いでいたら、そのうちずぶつと腰を揺すられた。

「やつ、ああつ……なに」

「顔が見たい」

「んあつ……あつ、あ、わかっただから……っ」

一番感じるところを押し上げるように腰を揺すられて、たまらず俺は服を下ろした。熱の籠もつたグウエンの黒い瞳が舐めるように俺を見下ろしている。普段は俺が顔を隠しても許してくれるのに、今日はそのつもりがないらしい。

いつもより意地悪な理由はわかっている。こいつなりの腹いせだ。グウエンは俺のことで気に入らないことがあると、ベッドの中で言うことを聞かせてさりげなく当てつけてくる。ちよつと性格が捻くれてるよな。

お前のその地味な嫌がらせ、とつくに気づいてるんだからな。

涙目になりながらグウエンを軽く睨む。肩まで伸びた艶のある黒い髪が、首元で律動に合わせてゆらゆら揺れている。目が合うと、グウエンは散々いじくつた乳首から手を離して俺の腰を掴んだ。そして甘く疼いているさっきの場所に猛つた熱の塊を押し当てて、強めに突き上げてくる。

「んんっ、あつ、やつ……お前はっ、そうやって、俺でうさを晴らすの、やめつ、あんっ」

「晴らしていない。無意識だ」

なお夕チが悪いよ。

再び抗議の目を向けると、覆いかぶさってきたグウエンにキスされた。同じタイミングで浅いところを擦っていた屹立がずぶりと奥まで押し込まれる。

「んあっ……」

思わず上向いて口を開くと舌が入ってきて、そのまま深く口づけられた。本格的な挿挿が始まり、俺はすぐるものを求めてグウエンのむき出しの肩にしがみつく。

「んっ、あッ、ふっ」

意地悪なことをしている最中でもキスは優しい。たまに腰が抜けるくらい強烈なのをかまされるが、普段はゆっくりりと俺の口蓋や歯列を舐めてきて、舌を合わせると優しく舌先で撫でてくれる。舌を絡めて軽く吸われたり、舌全体で擦り合わせてきたり、俺の反応を見ながら進めてくれるのだ。気持ちよくて頭の中がくたつとしてくると、そのうち腰の律動が激しくなると唇を塞がれたまま絶頂まで追い込まれた。

「……ッ、んん——ッ」

「……っ」

達してびくびく震えながらグウエンを締めつける。俺をキツく抱きしめて息を詰めたグウエンが雄芯を引き抜くと、会陰の辺りに熱い飛沫しぶきがかかるのを感じた。

「は……あっ」

脱力した途端、唇が優しく重なってきて啄くわむように食はんでくる。弾んだ息が整うまで顔中にキスされた。意地悪な空気が緩まったことに安堵し、俺もグウエンの唇を追って鼻先を擦り寄せる。

しばらく無言でキスを続けていたら、息継ぎのタイミングで唇を離れたグウエンと至近距離で目が合った。愛しいと訴えてくる目に見つめられてつい照れ笑いを浮かべると、墨色の瞳の中にひとかけらの憂うれいが滲にじむのを見つけた。

「レイナルド……困った人を見過ごせない君の性分は理解しているが、もう少し自分を大切にしてほしい」

静かな声でそう言われて、俺は素直に頷いた。

「……うん。ごめん」

グウエンが俺の髪を優しく撫でてきて、額に張りついた前髪をそつと避ける。

「私は、君のその本質を愛しいと思っている。しかしそれと同時に、君がいつか傷つくのではないかととても心配になる」

真っ直ぐに気持ちを伝えてくれるグウエンを見つめ返して、心の中がじんわりと温かくなった。

「ん……わかった。今日はほんとにごめん」

「わかってくれればいい。私もしつこくしてすまなかった」

そう言われて優しくキスされるだけで、俺の心は安心してふやけていく。

唇同士が触れるくらいの距離で、グウエンがじつと俺を見つめた。

「愛してる」

「うん」

心地のいい低い声が耳から入ってきて頭の深いところに染みこんでいく。キスをしているだけな

のに、多幸感で指先まで甘く痺れる気がした。

広い背中に腕を回して、これ以上くっつく余地がなくなるくらいグウエンをぎゅっと抱きしめた。汗ばんだ腰に足を絡ませると、グウエンが再び目に熱を宿して俺の中に挿入<sup>はい</sup>してくる。

「んんっ……あ」

「レイナルド、愛してる」

「ん、うん、あっ……俺もすき」

とろとろに緩んだ中をゆっくり擦られて、何度も愛を囁<sup>ささや</sup>かれると全身がふにやふにやになる。さつきまで意地悪されていたことなんか、どうでもよくなった。

「あっ、んっ……グウエ、きもち、んう——」

ふわふわした意識で見つめると、蕩けるような甘い目をしたグウエンに唇を塞<sup>たぐま</sup>がれる。逞<sup>たくま</sup>しい身体に強く抱きしめられながら奥を優しく突かれたら、もう何も考えられない。

「んっ、ふあ、グウエン、もつと……んああっ」

「レイナルド、君を愛してる」

快感に満たされてびくびく震える俺の顔中にグウエンのキスが降ってくる。

こうやってぐずぐずになるまで愛されることに慣れてしまった。

だからたまに意地悪されても、俺は結局全部許して受け入れてしまうのだ。

\* \* \*

あれからまた二回ほど抱き合って、濃密な夜を過ごした次の日。

俺とグウエンは朝から王都の繁華街に出かけた。たまには街に出てデートすることにしたのだ。

昨日、俺がグウエンとカシス副団長と鉢合わせして駆け回った通りからは少し離れている。こちらの方が街の中心部に近くて、石畳のメインストリートの両側には華やかな賑わいのある商店やカフェが立ち並んでいる。

「グウエン、これ食べてみて」

俺は生地を捻<sup>む</sup>って揚げた形のドーナツを半分に割って渡した。俺が突然パン屋に立ち寄ってドーナツを買ったことにグウエンは驚いていたが、素直に口に入れる。

「どう？ 美味しい？」

「……美味しい」

「ほんと？ よかった。昨日の屋根のおじさんが食べさせてくれてさ。これならそんなに甘くないし、グウエンも食べられると思ったんだよ」

俺がほっとすると、グウエンドルフは口に入れたものをゆっくり咀嚼<sup>そしゃく</sup>して目元を緩めた。

ドーナツは素朴な味で美味しい。おじさんが教えてくれたお店がこの辺りのパン屋だったので、小腹を満たすために立ち寄ってみた。半分に割ったドーナツを店の外で食べる。そういえば、二人で買い食いなんて初めてじゃないか。学生に戻ったような気分になって、ちよっとうきうきする。

その後は街の広場に向かって歩き始めた。一週間後に王都で夏祭りが催<sup>もよほ</sup>されるのもあって、通り

は賑わいがあり、多くの露店や食べ物売るワゴンが並んでいた。

「あ、あの店見てもいい？ ウィルにお土産みやげ買おうかな。ベルがいなくて元気ないから」  
工芸品が並ぶ出店を見つけた俺は、グウエンのシャツの袖を引いた。

ウィルというのはいちで面倒をみている十一歳の男の子だ。五年くらい前に、訳あって俺が引き取った。今は俺専属の従者見習いのようなことをしている。ウィルはベルのお世話も手伝ってくれて、可愛がつて大切にしてくれている。

ベルはチーリンという癒やしの聖獣で、赤ちゃんのときに俺が森で拾ってうちで育てている。子馬と子鹿を足したような、銀色の毛並みを持つ見た目の美しい獣だ。

ベルは立派に成長してそろそろ二歳になるが、実は今里帰りしている。

二日前、保護してから初めて、俺はベルを故郷であるラズリシエの森に連れていった。森の奥まで行くと、ベルは耳をびくびくさせて辺りをぐるぐる回り始め、知っている気配がするからしばらく遊びに行つてくると言い出したのだ。夜には戻るのかと聞いたら、なんと数日は戻らないという驚いて待ったをかけようとしたが、よくよく考えて思い直した。いつかはベルを森に帰すことを考えると、いつまでも屋敷に留めておくわけにはいかない。ベルは俺の気配を追えるから、飽きたらすぐに帰つてこられるし、ラズリシエの森はエリス公爵領の中だから滅多なこともないだろう。ベルの俊足なら、狂暴な獣に出くわしても逃げられる。

俺はそう自分を納得させて頷いた。

『不安になつたらいつでも帰つておいで』

念押しすると、ベルはこくつと頷いて俺の足に頭を擦りつけた。

——ママ、心配しないで。遊びに行くだけ。

ベルが俺にしか聞こえない声でそう伝えてきたので、ぎゅつと抱きしめて後ろ姿を見送った。

ウィルもベルがいけないことにショックを受け、二人してその夜は意気消沈していたが、一晩寝て俺は気持ち切り替えた。きつとベルは無事に帰ってくる。帰ってきたら美味しいおやつとお気に入りのクッションでいっぱいもてなしてやろう。

でも、ウィルはまだ元気がないから、何かお土産を買って励ますことにしたのだ。

手作りの小物を売っている露店で、俺はベルに似ている白い馬の小さな置物を選んだ。ウィルは子供っぽいおもちゃは好きじゃないから、これなら机の上に置いて眺めてくれそうだ。

他にも動物の小物がたくさん売られていたので、目移りして色々見てしまう。

装飾具の中に狼の飾りがついたチャームを見つけて、思わず手に取った。黒っぽい金属で作られたチャームは、グウエンからもらった懐中時計に付けるのにちょうどよさそうだ。なんとなく、大型犬みたいな表情をするときのグウエンに似ている。

「これ、買おうかな。なんかお前に似てる気がするから」

軽く笑いながら言うと、グウエンは俺の手元を覗き込んでその周りに置いてあるものを見回した。しばらくして、その中の一つに手を伸ばす。

「私はこれを」

グウエンが挿んだのは、同じように金属で作られたシマリスだった。

それを見て俺は複雑な顔をする。

「なあ、それって俺に似てるから、とか言う？」

「この中では一番君に似ていると思う」

リスが？ 小動物に似てるって、若干複雑な気持ちになるな。

蛙とか言われないだけマシだけど、でも、リス……？

「俺そんなに可愛くないと思うけど」

「君は愛らしい。そして忙しくないところが似ている」

「……」

どう反応すればいいんだ。

喜ばばいいのか反論すればいいのかわからず黙ると、グウエンは二つのチャームを持ってウイルのお土産と一緒に会計してしまった。

「ありがとう。狼とウイルのお土産は俺が出すよ」

「気にしなくていい。大した金額ではない。先ほどのパンのお礼に」

さっきのドーナツの金額なんてそれこそたかが知れてるんだけど、生真面目な顔をしたグウエンを見て、俺は頷いた。まあ、俺達金には困ってないしな。

それよりも、こうして何かプレゼントしてもらう機会は滅多にないから少し嬉しい。

「さんきゅ」

グウエンを見上げてお礼を言い、狼のチャームを時計と一緒にズボンのポケットにしまった。

その後、街で一番大きな広場に行った。

尖塔のある大きな教会と、旅行者が利用する宿、それからオープンテラスのあるカフェやレストランに囲まれた、四角い形をしたかなり大きな石畳の広場だ。

夏祭りを控えている広場では、舞台を造る準備なのか、大工達が広場の中央に集まって木の板を組み立てている。街を歩く人に交じり、楽器を弾きながら小金を稼ぐ芸人や、路地から大きな荷物を馬車に運び込む炭売り、手押し車でジュースやパンを売る人がいて、広場は賑やかだった。

人混みを横切って歩いていたら、カフェのオープンテラスに見慣れた桃色の髪が目に入った。

「あれ、ソフィアちゃん？」

俺の声で、広場を眺めていた女性が振り向く。テラス席に座って、氷の入ったグラスを手にした相手と目が合った。

「レモナルドか。偶然だな」

「ほんとだね。あの、一応訂正するけど俺の名前はレイナルドね。ソフィアちゃんも休み？」

「ああ」

ソフィアは、俺の悪友であるルウエインの奥さんだ。ボードレール商会という、老舗しんせの店をルウエインと共に切り盛りしている。

ソフィアのの前には、ピンク色のワンピースでおめかししたオルタンシアが座っていた。ふわふわのミルクティー色の髪を緩く編んでいる小柄で可愛らしいこの令嬢は、ソフィアの秘書であり、ルウエインの弟ユーリスの婚約者のオルタンシア・マルス子爵令嬢である。

オルタンシアは俺に気づくと、ソフィアに気取られないように嫌そうに眉を寄せた。この令嬢はソフィアに心酔しすぎていて、それ以外の人間に興味がない。俺はオルタンシアに、ソフィアとルウエインに厄介事を持ち込む面倒な奴認定されていて、会うたびに小言を言われている。

「グウェンドルフ卿も一緒か。魔道機関車の件では世話になった。二人とも元気そうだなよりだ」

ソフィアがグウェンに会釈して、オルタンシアを振り返る。

「貴殿に紹介するのは初めてかもしれない。こちらの令嬢はオルタンシアという。私の秘書だ」

「オルタンシア・マルスと申します。グウェンドルフ団長、お噂はかねがねうかがっております」  
オルタンシアがグウェンを見て可憐に微笑んだ。彼女の名前を聞いたグウェンの眉間がびくりと動く。

そういえば、グウェンがオルタンシアと直接会うのは初めてだったか。

以前、オルタンシアからの無理難題で、俺は社交パーティーで女装させられたという苦しい思い出がある。魔道機関車の事件での被害を弁済しろと強制されて、あれは俺の忘れたくない黒歴史の一ページになったんだ。

思い返せば、オルタンシアが関わったことには全て碌な思い出がない。グウェンもオルタンシアを絶対警戒している。彼女の名前を聞いた途端、俺の傍にびったり近づいてきた。何かあったら俺を抱えてすぐに立ち去ろうという気配を感じる。

ソフィアから見える角度では可憐に微笑むたいけな令嬢の顔をしているオルタンシアだが、そ

の本性は苛烈だ。ソフィアがグウェンドルフに話しかけた一瞬のうちに、「は・や・く・き・え・て」と口の動きだけで伝えてきた。鬼のような目で。ソフィアとのデートを邪魔したのは悪かったけど、その二面性はどうにかならないのか。極度のブラコンであるユーリスも似たようなものだが、この夫婦に継承される伯爵家の未来に不安を抱く俺だ。

内心ため息を吐いていると、ソフィアがついと俺を見た。

「ところでレモ、あの馬車に気づいているか？」

「うん。グウェンもだよな」

「ああ」

「馬車？」

一人だけ不思議そうな顔をするオルタンシアに、ソフィアが広場の方を指差す。

「あれだ。不審な動きをしているだろう」

その言葉に、オルタンシアが広場の隅で大きな荷物を積んでいる馬車に視線を送った。

「もう夏だつていうのに、炭売りがいるのは不自然だよな。あの大きな荷物も」

俺は今にも走り出そうとしている馬車を横目で見ながら言う。

まるで人には見られたくないものを運んでいるみたいだな。馬車の荷台に積んだ荷物の箱は、人間が一人余裕で入る大きさだ。箱を運んでいる男達も、炭を売る商売人にしては人相が悪い。

「追うか？」

「そうだね。思い違いかもしれないけど、確認してみよう。人がたくさんいるから騒ぎにならない

ように、こっそり追いかけてようか」

グウェンを振り仰ぐと、首を縦に振って同意してくれる。ソフィアも立ち上がった。

「シアはここで待っているか？」

ソフィアがそう聞くと、オルタンシアは首を横に振った。

「私も行きます。お姉さまだけ危険な目に遭わせるわけにはいきませんわ」

続けて立ち上がったオルタンシアに頷いて、ソフィアがその肩に軽く手を置く。

「わかった。危険かもしれないから私から離れるなよ」

「お姉さま……」

真剣な表情のソフィアを、恍惚とした目で見上げるオルタンシア。二人の周りに花が咲いているように見える。怪しい世界を垣間見た気がして、俺は後ずさった。

「さて、走るのか？ レモ」

テラスから出てきたソフィアが、オルタンシアの荷物を自分の鞆の中に入れてながら言う。

ソフィアは白いシャツに薄手のスラックスとヒールの低い革靴という、女性には珍しい格好だが、凛々しい彼女にはよく似合っている。成り行きでボードレール商会の女子二人に遭遇したが、いい戦力である。特にソフィアは攻撃力が高いので頼りになる。

「飛んだら目立つし、辻馬車で追うのも気づかれるリスクが高い。しばらく人通りの多い道だからそんなにスピードは出せないはずだし、このまま追いかけてよう」

「そうだな」

ソフィアが頷いて、俺達四人は走って馬車を追いかけた。オルタンシアはヒールの靴でなんなくついてくる。すごいな。俺は女装させられたとき、ヒールで走るなんてとてもできなかったぞ。

そのうち、人通りの少ない路地で馬車がスピードを上げた。

「レモ、どうする。そろそろ馬車を止めた方がいいんじゃないか」

「うん。ただ魔法で馬の足を止めてもいいけど、そうすると荷台が横転する可能性がある。荷物の中に何が入ってるかわからないからなあ」

昨日の反省を活かして慎重な意見を述べると、横からオルタンシアが口を出してきた。

「お姉さま、時間ももつたいたいですし、いつそほろを燃やしてしまうのはどうでしょう。そうしたら馬車を止めて降りてくるのでは？ 私、火の加護がありますから撃ち抜きましょうか？」

どこから取り出したのか、手に杖を持って恐ろしいことを言い放つオルタンシアに、ソフィアがやはり真面目な顔で首を横に振った。

「いや、もしかしたら本当に炭を積んでいるかもしれない。火はやめておこう」

「ちよっといい？ 怪しいことは怪しいけど、万が一誤解だった場合に備えて馬車に損害を与えるのは避けた方がいいんじゃないか」

そう釘を刺してから、俺は隣を走っているグウェンを横目で見た。

「グウェンは何か考えある？」

「馬車ごと浮かせて進行を止めればいいのでは」

「……確かに」

普通、あんなに人が乗って重量のある馬車を浮かせるなんて、余程の魔力量がない限り思いつかないだろう。風の加護を持つている俺でもたじろぐレベルだ。言われてみれば、唸るほどの魔力量を持つてる奴が今一緒にいるんだっとな。

「じゃあそれで行こう。馬車を浮かせて止めた後は、乗り込んで中の様子をうかがって、やっぱり不審者だったら制圧するってことで」

俺の提案にソフィアとグウエンドルフが頷いた。

「お姉さま、こちらを」

オルタンシアがソフィアに何かを差し出す。横目で見たら、それは鋭利な棘のついた鋼鉄のナックル——前世の俗な言い方をすればメリケンサックだった。

「こんなこともあるうかと持ってまいりました」

「準備がいいな。シア、ありがとう」

「とんでもないことですわ」

オルタンシアはソフィアから荷物を受け取って、代わりにその武器を渡す。

俺は彼女達のやり取りを半目で見つめた後、視線を逸らした。

俺は何も言わないぞ。どうしてそんなものを、とかここで突っ込んだらいけない。どうせいつも使ってる品だから、とか、ちょうどメンテナンスから戻ってきたところで、とかさらに恐ろしいことを言い出すに違いない。見なかったことにしよう。

気を取り直して馬車に意識を向けると、グウエンが人気のない道で馬車を浮かせていた。続けて

地面を蹴って一息で飛び上がり、馬車の向こうに消える。御者台に飛び乗ったんだろう。すぐに御者の男が地面に蹴り落とされてきた。

あれ？ 様子を見るって話はどこに行っただんだ？

俺が首を傾げたときには、ソフィアも颯爽と荷台に飛び乗っていた。すぐに怒号と鈍い音が続けて聞こえ、気絶した男達がどんどん外に放り出される。グウエンも制圧しているのか、異常なスピードで不審者達がのされていく。

俺は心の中でタイミンク悪く目撃されてしまった不審者達に合掌した。この二人に行き合ってしまったことが、彼らの不運だったとしか言いようがない。

気絶して地面に転がる男達を、俺とオルタンシアで順番に縛り上げた。

男達を片付けた後、グウエンが馬車を地面に下ろす。戦闘慣れしているグウエンはともかく、ソフィアも拳のみだったにもかかわらず無傷だ。強い……

「レモ、馬車には炭なんて積んでいなかった。さつき運んでいた箱以外のは何も無いな」

ソフィアが荷台から軽やかに飛び降りて言う。

グウエンが荷台の中にあつた大きな箱を魔法で外に出し、地面に下ろした。

近づいて木箱の蓋を開けてみると、中には気を失っているお婆さんが横たわっていた。

「あれ？ この人……」

俺はそのお婆さんに見覚えがあつた。

「レモの知り合いか？」

「うん。昨日、街の露店で会ったんだ」

昨日街の騒ぎで知り合った、脱走した犬を飼ってたあのお婆さんだ。なんでこんなところに？

「とりあえず、人攫いで間違いないようだな。警備隊を呼んでくる」

ソフィアがオルタンシアを連れて広場の方へ戻っていく。

「うーん……」

日の光が差し気がついたのか、お婆さんが薄ら目を開けた。

「ん？ お兄さんは昨日の……？」

「お婆さん、大丈夫？」

お婆さんはきよんとした顔で周りを見回して、地面に転がっている男達を見つけた。

「ああ……また助けてもらったようだね」

そう言いながら箱の底に手をつけて立ち上がり、俺とグウエンの手を借りて地面に降りる。

「お婆さん、攫われてたんだよね？ 今知り合いが警備隊を呼びに行ってるよ」

「警備隊？ それは困るねえ……」

お婆さんが顔を曇らせたので、俺は首を傾げる。

「訳あり？」

「実はついこの間、外国からこの国に来たばかりなんだ。外国人っていうだけで目立つのに、すぐに警備隊に目をつけられるのは困るねえ」

眉尻を下げたお婆さんを見て、俺は少し考えた後、ズボンから手紙蝶を一通取り出した。最近ほ、

懐中時計の中に仕込んである以外にも予備を持っておくようにしている。結構役に立つんだ。

杖でメッセージを書き込み、ソフィアに宛てて飛ばした。

「お婆さんが訳ありって書いておいた。上手くやってくれると思うから、様子を見よう」

近くの路地裏に入って馬車を見守っていると、程なくしてソフィア達が警備隊を連れて戻ってきた。俺達はいないけど、馬車と怪しい男達は残っているから上手く処理してくれるだろう。

男達を運行していく警備隊の様子を確認して、俺はお婆さんとグウエンと一緒に路地を進んだ。

人気がなくなったところで立ち止まり、お婆さんを振り返って首を傾げる。

「お婆さんはこれから大丈夫？ なんで攫われてたの？」

そう聞くと、お婆さんはため息を吐いて頬に手を当てた。

「さあ、なんでだろうねえ。理由はわからないよ。あの男達は私が占った依頼人の関係者だろうが」

「……占った？」

「私はね、よその国で占い師として生活していたんだよ。とある少数民族の末裔まごえいのさ。数年前、偉い人に頼まれてあることを占ったが、期待されたような結果が出せなかった。それで家を焼かれて身を隠していたけれど、最近また追われるようになったから国から逃げてきたんだよ」

占い師？ デルトフィア帝国では聞かない職業だ。そもそも、この世界で占い師なんて初めて聞いたな。

俺は新鮮な驚きを覚えてお婆さんの顔をまじまじと見た。確かにお婆さんの肌は少し浅黒くて、

髪は年齢のせいか白髪だけど、瞳は独特な色合いの濃い青色だ。

「人の運勢を占うの？ それとも、未来を予測できたりすること？」

「いや、ただの占いだよ。これからどうしたらいいか迷った人が助言を求めてくるのさ。私にできることは占った結果を伝えることだけだね」

「たとえばどんな？」

興味本位で聞いてみると、お婆さんは少し考えるような顔をした。

「そうさね、色々だよ。婚期はいつか、子供はできるか、仕事は見つかるか……大抵そんなものさ」

「へえ、なるほど」

「時々、商売仇や憎い相手を苦しめたいとか、呪いたいっていう困った依頼もあった」

「呪いたい……？ 呪術みたいなの？」

急に怪しい話になるな。俺が知ってる占いとはちよつと違うのかも知らない。前世の記憶だと、星座占いとか血液型占いとかいうイメージなんだけど。呪術っていうなら陰陽師の方が近いのかな。首を傾げて尋ねる俺に、お婆さんはため息を吐いた。

「私がやるのはあくまで占いだよ。呪う方法を教えてほしいとか、逆に呪いを解きたいとか頼まれたこともあったけど、ほとんどは断ったよ。素人が軽い気持ちで呪術に手を出すものじゃない。呪いにはそれ相応の代償がいるんだから」

何か思うところがあるのか、お婆さんは沈んだような顔をしている。

個人的な事情に踏み込みすぎたかなと反省して、俺は話を変えた。

「えっと、さっきお婆さんを拉致しようとしたのは、以前に占いを頼んだ人達ってこと？」

「おそろくそうだろう。巻き込んですまなかったね。私の占いの結果に不満でもあったんだろう。さて、住処を知られてしまったことだし、また移動しなけりやならないね」

不安そうな声で独り言を漏らしたお婆さんを見て、俺はあることを思いついた。

「ここで会ったのも何かの縁だし、もしよければエリス公爵領に来る？ 郊外の小さな村になるとは思うけど、村長に一筆書くよ。しばらく匿ってもらえるように」

そう言ったらお婆さんは目を見開いて驚いたので、そういえば身分を明かしていなかったことを思い出した。

「俺、南領エリス公爵家の次男坊なんだ。人攫いではないから安心して」

得意のへらつとした笑みで告げると、お婆さんはまじまじと俺を見た。それからほつとしたような表情になって微笑み、俺の両手をそつと握ってくる。

「本当かい？ それはありがたい話だ。二度も助けてもらったうえに、こんなご厚意をもらえるなんて。お兄さんは身分のある方だったんだね。今まで無礼な振る舞いがあつたら許しておくれ」

感謝を滲ませた言葉の後、お婆さんは俺の手に何か握らせた。見てみると、それは小さな三日月型のペンダントトップがついた金色のネックレスだった。緑色の石が三日月の真ん中についている。

「私からのお礼だよ。これは歴史のある魔道具の一つだね。身につけていれば、お兄さんの身に最も大きな危険が迫ったとき、その石が一度だけ危険を肩代わりしてくれる」

「え？」

俺は目を丸くして、三日月の華奢なペンダントをじっと見下ろした。

すごい力が宿っているようには見えないが、本当だったらすごいアイテムだ。

「そんな貴重なもの受け取れないよ。お婆さんが持っていた方がいいんじゃないの？」

「いや、私には必要のないものでね。それに、言っちゃ悪いがお兄さんの顔には受難の相が出ている。これからもよからぬことに巻き込まれるだろうから、持っておいた方がいい」

「……これからも？」

も、つておかしくない？

困惑する俺の隣からグウエンの強い視線を感じる。俺のせいじゃないから。お婆さんの見立てなんだから、そんな責めるような目で見ると見るなよ。

「そうなんだ……ありがとう」

今までの経験上笑い飛ばして否定することができず、俺は乾いた笑みでお礼を言い、ネックレスをありがたくしまった。

……受難の相って、何？ どんな苦難が来るの？ すごく怖いんだけど。

さっきの広場から近い路地裏にお婆さんの隠れ家があるそうで、そこまで一緒に行った。部屋の扉を開けると、昨日の犬がお婆さんを見て尻尾を振って喜んでた。

俺は取り急ぎ馴染みの村長に手紙をしたためて、それをお婆さんに渡した。今になって名前を聞

いたら、お婆さんの名前はサエラというらしい。お婆さんの名前も手紙の中に書いて、最後にサインする。家に戻ってから、村長にはもう一度ちゃんと手紙を出すつもりだ。

荷物は少なかったようで、すぐに準備を整えたお婆さんと犬を連れて、エリス公爵領に向かう馬車に乗せた。村までの行き方を説明して、停留所で別れる。

「お兄さん、本当にありがとう」

「うん。こちらこそ貴重なお守りをありがとう。また連絡するから、気をつけてね」

「次に会ったとき、お兄さんの今後を占ってあげよう」

「……お願いします」

何を言われるか怖いけど、受難の内容を教えてくれるなら助かる。

お婆さんを見送った後、ソフィア達と合流するため、広場に向かった。歩きながら、俺はさっきの金色のネックレスをグウエンに見せる。

「これ、グウエンが持つてる？ 普段魔物と戦って危険があるのはお前だろ」

「いや、君が持っていた方がいい。これからも苦難に遭うのだから」

「……」

言い方に変な含みを持たせるなよ。俺だって巻き込まれたくて巻き込まれてるわけじゃない。

グウエンが小さく嘆息して、横目で俺を見た。

「やはり、鎖が必要かもしれない」

「その発想から離れなさい」

物騒な話をしながら広場に辿り着く。そこは先ほどよりも混み合っていたが、ちょうど俺達がいる場所の反対側からオルタンシアが歩いてきた。広場の真ん中で俺達に気づいた彼女は、仁王立ちして顎をしゃくり、俺に「こっちへ来い」と合図する。

おい、貴族令嬢。どこで覚えたんだよ、そんな不良な仕草。お前の母方の実家は小さな教会のはずだろう。

オルタンシアがいる場所まで行くと、彼女は俺達に鋭い視線を投げたまま腕を組んだ。

「グウェンドルフ団長。警備隊の詰所にお姉さまがいらっしやるの。団長が行けば警備隊はもう何も言わないでしょうから、すぐにこの件を片付けてきてくださる？ 後始末を押しつけられたお姉さまがお困りなので」

早く行け、とオルタンシアが目でグウェンドルフに圧をかける。仮にも近衛騎士団長によくそんなことが言えるな。さすが悪役令嬢、と俺は変なところで感心した。

無表情のグウェンは微動だにしなかったが、俺が背中を押して警備隊の詰所へ行かせた。

お前は普段オルタンシアと関わらないからいいけど、俺は違う。後からぐちぐち嫌みを言われるのは俺だ。さっさと終わらせるに越したことはない。

「グウェン、頼む。できるだけ早くソフィアちゃんを連れてきて。察してると思うけど、オルタンシアはソフィアちゃんがいないとすごく嫌な女になるんだ」

そう小声で言うと、グウェンは渋々詰所に歩いていった。

オルタンシアと残されて気まずい俺は、意味もなく周りを見回した。

広場の中央では夏祭りの舞台の組み立てが進んでいる。傍で見ると結構大きくて、雨よけの屋根もある大掛かりな舞台だ。演目が面白そうだったら、俺も時間を作ってグウェンと来ようかな。

現実逃避していると、オルタンシアが腕組みをしたまま「ちよつと」と話しかけてきた。

「レイナルド、あなた覚えてる？ 私がお姉さまといるときは、街で見かけても声をかけないでって言ったわよね」

「ごめんって」

ソフィアちゃんを見つけたときは、オルタンシアが見えてなかったんだよ。言い訳すると余計逆上するかもしれないから、とりあえず謝っておく。

「呑気に団長とデートしてるなんて、あなたに頼んだものはもうできてるって思っているの？」

「あゝ……いや、それはまだ」

「私とお姉さまの時間を邪魔しておいて、それでお詫びに出すものが何もないの？」

「オルタンシア、キレてるのはわかるんだけど、思考がヤクザなんだよ」

「ヤクザって何よ。ヤクザだからクダだか知らないけど、人が頼んだものを後回しにして遊んでるなんて、ひどいじゃない。あの魔道具の材料を用意するために私がどれだけ——」

「危ない!!」

突然上から声がした。ぱつと見上げると、俺達のすぐ傍で組み上がっていた祭りの舞台から屋根が滑り落ちるところだった。厚みのある巨大な板が四枚、オルタンシアを目がけて降ってくる。

状況を頭で理解する前に駆け寄り、俺はオルタンシアを強く押し出した。

「きゃっ」

上を向いて固まっていたオルタンシアが、大きく見開いた目で俺を見る。

板が落ちてくる前に、俺は手を伸ばして風の精霊術を放った。落下のスピードは緩くなったが、バラバラのタイミングで落ちてくる板を全て捉えるには時間が足りない。力任せに旋風を起こして吹き飛ばせば、板が人混みに飛んでいってしまうし、土の魔法で板を受け止めたら、今度は石畳が崩れて舞台が崩壊するかもしれない。

ふいに巨大な板に視界を遮られて、最後の一枚が完全に捕捉できなくなった。気流を操るのが下手くそなのが、こんなところで足を引っ張った。板が俺の上に落ちてくる。

まずいな。身を翻そうとしたとき、目の前に迫っていた巨大な板がびたりと停止した。

「レイナルド！」

焦ったような低い声が聞こえて、俺は途端に肩の力を抜く。

振り返り、強張った顔のグウエンが離れた場所にいるのを見つけた。後ろにソフィアもいる。

あつという間に駆け寄ってきたグウエンが、俺の腰に腕を回して抱きしめる。

「グウエン、ありがとう。助かった」

その勢いに驚いて、「大丈夫だったのに」と言いかけた言葉を呑み込んだ。目の前の黒いシャツを握りしめる。広場にいた人々が何事かと振り返り、板が空中に浮いているのを見て騒然としていた。

「シア、大丈夫か」

ソフィアが地面に尻餅をついたオルタンシアの傍らに膝をついた。

青い顔をして固まっていたオルタンシアは、ソフィアの声かけて我に返って周りを見回した。ソフィアの手を借りて立ち上がっても何も言わない。さすがに怖かったようだ。

大工達が血相を変えて集まってくるので、俺はグウエンから離れようとした。だけど、顔を埋めているグウエンの胸から心臓が激しく鳴る音が聞こえたので、黙ってそのまま抱きしめられることにした。

グウエンが落ち着きを取り戻すと、魔法で浮かんでいた板が地面に下ろされた。土下座して謝ってくる大工に手を振って、ソフィア達と一緒にその場から離れる。これのせいで夏祭りが中止になったら残念だし、俺達があんなところで立ち話してたのも悪かったしな。

周りに集まっていた人々も俺達が離れると解散し、広場は元のような賑わいに戻っていく。

別れ際、オルタンシアが俺に歩み寄ってきた。まだ少し青い顔で俺を見上げる。

「レイナルド、あなたって本当に……」

「え？」

「いいえ……いいわ。これは私が言うようなことじゃない。きっと団長が言ってくれるわね。……助けられてありがとう。この借りはいつか返すわ」

真面目なトーンで淡々と告げられ、俺はちよつと居心地が悪くて頬を掻いた。

「いや、借りとかじゃなくていいけど……。そういうつもりだったわけじゃないし」

相変わらず律儀な性格だな、と思つて答えると、オルタンシアは大きな目をさらに大きくした。

「だから、あなたのそういうところが……いいから借りにしておいて。じゃないと私の気が済まないの」

「うん……？」

顔を顰めて呟くオルタンシアに、俺はとりあえず頷いておいた。

ソフィア達と別れて、俺とグウエンドルフはフォンフリーゼ公爵邸の離れに戻る。

どうせなら街で昼飯を食べてから帰ろうと言ったのだが、強張った顔をしたグウエンが首を横に振ったので断念した。このまま俺が街にいたらまた何かに巻き込まれるとも言いたげな顔だった。木の板が落ちてきたのは予想外だったけど、たとえば一人でも回避する自信はあったし、怪我するつもりもなかったんだ。

そういえば、お婆さんにもらったネックレスは何も反応しなかった。結局は単なるお守りだったのか、それともあの程度では危険のうちに入らないということか。

これから待ち受ける受難というのがどれくらいのものなのか、すぐく不安になるんだが。

屋敷に戻り、二階の寝室に入つてすぐにグウエンが振り返った。

「君は、何故いつもそう息を吸うように自分の身を投げ出すんだ」

怒った調子の声で言われて、俺は少しむっとする。昨日に続けてまた怒られるのか。

「……投げ出してないけど。さっきのは多分ギリギリで避けられたし」

大丈夫だったと言いたくて反論したら、グウエンはますます不機嫌になった。

「自分を大切にしてくれと、昨日言っただろう。見殺しにしるとは言わないが、軽々しく自分の身を危険に晒すのはやめてくれ」

グウエンの言いたいことはわかる。心配させてしまったのも悪かったと思っっている。でも俺は、さっきの自分の判断が間違っていたとは思わない。

俺はため息をついて両手を上げた。

「驚かせて悪かった。でも、あのままだったらオルタンシアが大怪我してたから」

「だとしても、もう少し身の振り方を考えろ。君がああ板に押し潰されたらどうするつもりだったんだ」

「だから、さっきのは多分ギリギリで避けられたって」

「避けられなかったかもしれないから言っている。何度も言うが、君は普段からもう少し冷静に物事を判断した方がいい」

俺が素直に謝らずに言い返したからか、グウエンは珍しく棘のある口調で責め立ててきた。

心配してくれたのはわかるよ。でもそれって、まるで俺がいつも何も考えてないみたいじゃない方じゃないか。確かに咄嗟に手が出る時はあるけど、なんとなくカチンときた。

昼食を食べ逃して腹が減っていたから、それで余計に気が立っていたのかもしれない。

「へえ。冷静な判断っていうのは、たとえばどういうことを言うんだ？」

むすっとした顔で腕を組むと、グウエンは少し怒気を緩めたが、硬い表情のまま口を開く。

「周りの状況を見て、それが本当に必要なのか、手を出さずとも解決できるのかどうか見極めると

言っている。たとえば、もしあの板の下にいたのが私だったら、君は助けなかっただろう」

「……は？」

俺はもっと低い声を出したが、グウエンは気づかない。考えるような顔のまま続けた。

「君は私の実力を知っているから、無闇に飛び込んだりはしないはずだ。それでいい。それが状況を読むということだ。その判断の中に、次は君自身の身の安全も含めてほしい」

「おい、ちよつと待てよ。もしお前が落ちてくる板の下にいたら、お前は俺が助けなくて黙って見ていると思ってるのか？」

なおも話を続けようとするグウエンに、今度は俺が不機嫌さを全開にして問い詰めた。

彼は怪訝そうに俺を見つめる。

「それはそうだろう。たとえば子爵令嬢と私があ板の下にいたら、君は彼女の方を助けるはずだ。

それは当然——」

「お前何言ってるの？」

途中で言葉を遮ってグウエンを睨んだ。

もうカチンじゃない。プチツときた。こいつは一体何を言ってるんだ？

込み上げる憤りを抑えようとしたが無理で、何故俺が怒っているのかわからない、という顔をするグウエンにさらに腹が立つ。

ダメだ。キレル。

「あのなあ……お前が板の下にいたら、お前を助けるに決まってるんだろ!!」

苛立ったまま怒鳴ると、グウエンの黒い瞳が大きくなった。

「なんで他人をお前より先に助けなきゃなんねーんだよ！ お前を助けるよ！ 当たり前だろう

が！」

怒鳴ってグウエンを睨みつける。

冷静に状況を判断できるなら、弱い者を先に助けるだろう。それはそうだ。

ただしそれは、目の前にいるのが他人だったらの話で、好きな奴が危機的状況に陥っていたら、そんなこといちいち冷静に考えられるわけない。

なんでそんなことがわからないんだ？ こいつは俺を何だと思ってるんだ。

「レイナルド、私は……」

戸惑った顔で言葉を探しているグウエンを、俺は待てなかった。いつもならグウエンが自分の言葉で話し始めるまで俺は待つが、今日はそれができない。

グウエンが言ったことがどうしても許せなくて、俺は猛烈に腹を立てた。

「実力がどうか関係ねえよ！ 気持ちの問題だろ!!」

さっきよりも大声で怒鳴ったら、グウエンが目を見開いた。

「なんでその天秤に平気で自分を並べるんだ!? 俺がお前を助けないなんて言い切るなよ！ オルタンシアとお前だったらお前の方が大事に決まってるんだろ！ 考えるまでもねえわ！」

言いながらますます腹が立つてくる。

実際オルタンシアとグウエンが同時に天秤に乗っていたら、俺は状況によっては別の選択をする

かもしれない。でも、初めから迷わないなんて決めつけてほしくない。

俺が怒っていることは、話の本筋からずれている。それはわかっているが、憤らしいものが胸の中でうず巻いていて、もう自分でも何の話をしていたのか思い出せなかった。

グウエンは固まっている。手加減なく捲立てる俺の剣幕に、口下手なこいつが敵うわけない。

「今日は俺が助けられる余裕があると思っただけからオルタンシアを助けただけ！　なんでそれとお前への気持ちを一緒の土台で話されなきゃなんねえんだ？　なんで俺が助けられないなんて決めつけんだよ！　さつきお前は真つ先に俺を助けただろ！　俺だつてそうするよ！」

身の内に溢れたものを叩きつけるように声を荒らげたが、全然気持ちが収まらなかった。

「俺のこと何だと思ってるの？　強いから見てていいや、なんて思う程度の奴に身体まで好きにさせるわけねえだろ！　俺の気持ちを甘く考えてんじやねーよ!!」

俺がグウエンを助けなくて、さも当たり前前みたいな顔で言われたことが許せない。

なんで簡単にそんなことを口にするんだ。グウエンは俺の気持ちを全然わかってないんじゃないかと、絶望すら感じる。

固まったままのグウエンをきつく睨んだ。瞬きもせずに墨色の瞳を睨めつけて、息を吸い込む。

「お前はその、俺に関する自己評価の低さを何とかしろ！」

そう怒鳴り散らして、まだ憤りを収められない俺は深呼吸してからグウエンに背を向けた。狼狽うろたえたような、不安そうな目をするグウエンから視線を逸らす。

「レイナルド」

慌てて追いかけてくるグウエンの足音を聞いて、俺は振り向いた。勢いそのまま胸ぐらを掴んで強く引つ張った。グウエンの唇が当たるくらい勢いで自分の唇を押しつけると、すぐに突き離して扉に向かう。

「俺、今どうかしてる。頭冷やしてすぐ戻ってくるから、待つてる」

そう言い捨ててグウエンの顔を見ずに、早足で部屋から出た。

グウエンは俺を追わず、多分その場で立ちすくんでいる。傷つけないわけじゃないから、胸を絞られるような息苦しさを感じたが、あの場に居続けたら俺はもつとグウエンを傷つけたかもしれない。一回冷静にならないとちゃんと話ができないだろう。

頭を振って、グウエンの家の書庫にある転移魔法陣から実家の庭に転移した。気持ちを切り替えたら、すぐに戻ってくるつもりで。